

古典研究会編

汲古

第 84 号

日本大学図書館文学部分館蔵「頓阿法師名所集」について——「歌枕名寄」抄出・摘出・増補——

樋口百合子 1

「閑窓自語」中巻第四七話「釈奠上卿毎事問人語」と「統史愚抄」

芝崎有里子 7

舟木杏庵「南遊紀事」の紹介と翻刻

新稲法子 13

小中村清矩「尾張国解文略説」について

浦野都志子 20

「高勾麗好太王墓碑」——発見時期と光緒二年本の再考——

河野雄一 26

馮夢龍の「中興実録」について

大木 康 32

光緒十年怡怡堂刊「閔帝明聖真経」と

小谷友也 38

斉有堂「靈験記」について

佐々木 聡 45

「朱子語類」卷三十一訳注（七）

恩田裕正 45

涓涓滴滴

岸本美緒 53

妖怪とアヘン戦争

兼築信行 57

編集後記

金 文京行 58

新刊近刊案内

汲古書院

令和5年12月

舟木杏庵『南遊紀事』の紹介と翻刻

新稲法子

はじめに

河内の一津屋村の医師、北山橋庵（一七三二—一七九二）は混池社と交遊があり、朝鮮通信使と漢詩の応酬をした文化人として知られているが、次の世代が残した詩文について文学的な観点からの研究は進んでおらず、橋庵の高弟で詩文を能くしたとされる舟木杏庵（一七六二—一七九四）についても、ほとんど知られていなかった。

ところが、筆者が令和元年に近世の大坂の写本として一括で入手した中に、杏庵の自筆本が数点含まれていた。これらの写本は在村医を中心とした河内の漢文学を研究する上で不可欠の史料であり、順次公表する予定である。

本稿はその中から、『南遊紀事』と題する漢文紀行を紹介、翻刻するものである。

舟木杏庵について

舟木杏庵について簡単に述べておく。姓は舟木、名は信道、字は伯裴、通称は敬二、杏庵と号す。橋庵から北山姓を授けられ、

名も宛と改めている。宝暦十二年生、寛政六年六月二十九日没、享年三十三。先祖は江州蒲生郡舟木村の人で、曾祖父の代になって河内の東瓜破村に移り、医を業とした。杏庵も橋庵に医学を学び、その術大いに行われた。詩文を能くし、『橋庵先生詩鈔』の上梓に携わり、『橋庵北山元章先生行状』を記した。理由は不明だが、橋庵没後わずか三年で早世した。

前述の写本の一つ『採莢吟草』では、まだ少年だった篠崎小竹の漢詩を添削するなど、杏庵の詩人としての実力のほどが窺える。杏庵の詩業について詳しくは別稿で述べるが、含翠堂の陽明学者、篠原良翁を漢詩の師と呼んでおり、橋庵にのみ学んだというわけではないようだ。

杏庵の著作について

『大阪名家著述目録』³⁾によると、杏庵の著作として「北山橋庵行状」「杏庵詩稿」「採莢吟草」「撰遊吟草」「南遊紀行」が挙げられており、『国書総目録』や辞典類もこれを踏襲している。このうち「北山橋庵行状」は多治比郁夫が紹介しているが、その他の著作については存在が確認できなかった。

架蔵の写本には「杏庵詩稿」「採莢吟草」各一冊、「南遊紀事」

二冊が含まれるが、「南遊紀事」が「大阪名家著述目錄」等にいう「南遊紀行」であろう。「南遊紀事」二冊とも本文末尾に別に詩があることを記しているので、詩を加えた完本が存在する可能性も考えられる。

「南遊紀事」について

いまこの二冊の「南遊紀事」をそれぞれ八行本、十行本とする。八行本は紙継り綴じで、表紙左上に朱で「南遊紀事」、中央やや左寄りに墨で「自総角伴者不以無風流却之」とある。「無」は「風」と書きかけた上に重ねて書いているように見える。二四・五×一七、三センチメートル、行数八行、紙数は本文一〇丁、表紙・裏表紙を合わせて二二丁。朱で推敲の書き入れあり。

十行本も紙継り綴じで、表紙は白紙。本文は縦罫の用紙を用いるが、この用紙は「杏庵詩稿」等其他の写本と同じものである。「南遊紀事」は首題。二三・六×一六、二センチメートル、行数一〇行、紙数は本文九丁、表紙・裏表紙を合わせて一一丁。推敲の書き入れあり、墨と朱の両方を用い、朱は通常の色味のものとは白みがかった薄い色との二種類ある。通常の色味の朱の書き入れは薄い色の書き入れを訂正していたり、逆に訂正されたりしている。少なくとも通常の朱での推敲は数度にわたって行われたようだ。全体に虫損が甚だしい。

八行本と十行本の関係は複雑である。まず大きな違いとして、十行本にある和歌浦の眺望の描写が八行本にはない。これは収録するつもりだった二十首の詩に和歌浦を詠んだものが含まれていたからではないだろうか。また、八行本は悪路に苦しむ仲間の情けない描写が十行本と比較して抑え気味であり、配慮を感じさせ

る。八行本は誰かに進呈するために十行本を元にして作成したのではないだろうか。さらに、十行本の末尾には「乙巳十月念日校合畢」と朱で記されているが、八行本にはそのようなものはない。八行本には十行本ほどの推敲の跡はなく、十行本がある程度推敲したものを元に八行本を作成し、その後さらに十行本に手を入れたと推測する。

八行本表紙の書き入れについて述べておく。本文冒頭部にも「総角」「無風流」という表現があるので、返り点のある十行本から引用しよう。なお小文字で八行本の異同を示した。

天明甲辰春三月、余里中爲^付總角之好者、三五生相謀、遊^其南
中^マ焉、來^マ叩^マ草堂、切説^ニ與^レ俱、余性好^レ遊、意氣勃々^神
先馳、乃不以^レ農圃之子、固無風流、遂許諾矣、

天明甲辰は四年（一七八四）、杏庵二十三歳のことである。瓜破村の幼馴染みが高野山行きを計画し、杏庵を熱心に誘った。「三五」は本文中にも用例があり、数人ということのようだ。もともと旅好きの杏庵は、話を聞くだけで心は高野山に飛んでいくかのよう。そこで、皆なんといつても農村の育ちなので、旅に出ても自分のように風流を解すということはないだろうが、それを理由に断るということはせず、熱意に押されて行くことにした——という意味であろう。庶民が神社仏閣を参詣する旅行と知識層の文人趣味の旅行とは趣を異にするものであった。長じて医師となった杏庵が、幼馴染みとは階層を異にすることが滲み出た表現である。

この部分の返り点に順うと、表紙の書き込みは「総角自り好を結びし者、風流無きを以て之を却けず」と読み下せる。少年時代から付き合いのある者は、風流を解さないからといって付き合い

を絶つことはないという意味であらう。杏庵の気取らない人柄と、地域住民を分け隔てなく診察する在村医としての資質を表しているよう。

旅の日程は天明四年三月二十日から二十四日の四泊五日、折しも二十一日が空海の九百五十回忌法要で、参拝熱が高まっていた。行きは中高野街道を経由、帰りは高野山から和歌浦方面へ足を伸ばし、泉州を経て堺に到着。道中出会った人々と情報交換し、行き先やルートをその都度相談して決めている。そのため散々な目にも遭っているが、旅慣れた杏庵は「至此不得無旅況 此に至りて旅況無きことを得ず」「亦加旅況也 亦旅況を加ふるなり」と余裕を見せている。気の置けない者同士、笑いの絶えない楽しい旅であったことが窺える。

【南遊紀事】十行本翻刻】

- ・本文はいわゆる康熙字典体を用い、「々」は元の字に直した。
- ・添え仮名は片仮名を用い、合略仮名や踊り字は元の字に直した。
- ・改行は「」で示した。
- ・割注は（ ）で示した。
- ・句読点は冒頭部にしかないため、八行本を参考に補った。
- ・推敲の書き入れについて、加筆と訂正部分の文字をゴチック体で示し、訂正された元の文字は消去した。元の字に訓点と添え仮名がある場合、訓点はできるだけ残し、必要に応じて修正した。添え仮名は訂正後も変わらなければ残した。
- ・見せ消ちについては、文字の上に小丸のあるものは消去した。文字の上に単点のあるものは非常に多く、推敲の書き入れがない場合はそのまま残した。

【1才】 南遊紀事 舟木璋

天明甲辰春三月、余里中爲總角之好者、三五生相謀遊南焉、來叩草堂、切説與俱、余性好遊、意氣勃々神、先馳、乃不以農圃之子、固無風流、遂許諾矣、本月念一日、南山有大法會、蓋以開山弘法大師九百五十年回法忌也、以故自西自東、無不爭赴焉、吾曹亦做之云、念日、蚤發、渡和川、過三宅松原今井野田等村、左望菅生之祠林、右瞻茅海之遙碧、觀狹山池水、抵菜萸村、抵四釣樟、駐息於茶肆、會有近隣老少赴天野山者、問

【1ウ】

之、可二三三十町而近、(國制六十步爲町五十町爲里今從之)、相議、尋之、皆諾矣、路西折、漸入山間、峻隨或高或下、歷村落二三、抵天野山金剛寺、亦大師所創、營造頗整、樓門南嚮、榻後白河帝震翰金剛寺三字、入門有浮圖及殿堂一二、亦以來日法筵、宿有其設焉、出門東、又入山間、過高向川、抵三口市驛、合大道、此爲南山道、行客接跡、絡繹紛紛、若歸市、飯于一店焉、出而南經石佛岩、瀨天見等、更上山若干町、名紀見嶺、迺河紀分界處、故名也、下一里所、經過橋本驛、舟渡紀川、南三軒家清水長田等、抵學文路驛、日已高春、廼館焉、

【2才】

此夜逆旅、同宿客幾二百人、其佗乃可量知矣、二十一日、鷄鳴出館、地漸而山、步高一歩、二百步許、得劉萱堂、所謂劉萱道心之妻死焉、堂奠其妻及石、勳童子像、聞南山亦有名劉萱堂者、蓋道心之墓也、一行一里、抵鐘澗、

天始明、山路稍險、陟降曲折、山多桃李梨柳、村民所產也、又一里、爲神矢村、就店憩焉、少時、雨至、簑笠以出、離驛、得溪川、山水佳、絕渡石梁、則爲不動阪、險甚、賃一力夫、使之攜導、力夫年近六旬、而負載先進、感服其愛鑽、亦以其「平昔熟羊腸乎、數百步巨石當道、名四寸岩、凹而」

【2ウ】

爲路甚隘、厩容一人耳、愈躑躅、石燈崎嶇、沿崖循、巖、簑笠回、四十八盤、衆呻吟而躡、仰視前者、既一回、而在頭上、箬笠數十、隱見木末、累累乎綴綴乎、於芝菌叢生、廿町許、得不動堂、名之外不動、有數步之坦處、衆憩息焉、松杉森鬱、加以陰雨、春寒清肅、襲人、前乘險之閒、熱汗濕衣、至此忽肌膚戰栗、又躡如初、廿町、又有不動堂、名岩不動、又數町阪盡地平、得女人堂者、本山禁女子、自此起而上、不許入也、數十步、得金光院、結構宏麗、洒掃清淨、無不善美兼盡矣、蓋一山僧房、無慮幾千餘（或云七千七百七十有餘、虽自有優劣、而如此者、）

【3オ】

或過此者、往往有焉、不遇記實一大名盛哉、院側有熊手八幡祠者、祠獨懸手（熊手兵器似槍三叉狀類熊爪故名云）出而左旋、名小田原街、緇素雜居、大道如砥如矢、街坊俯飾、凡百交易較備、而唯不許酒食、此日也、四方之人、輻輳誼諱、恰如繁華城市、袈裟之閒、迺自不知其山嶺也、二三十町所、到第一橋、人家至此盡矣、濟一橋、道右左、石浮圓獨立、無慮數千、皆公侯富人之墓也、其最高大者二丈許、四邊構是、前立石華表、而概不署其名一姓、或刻其家章、或附小榜表上楫之耳、其營石也、不獨

崇其祖宗、唯威鏡以誇大也、一石而猶且非、數十百人、不可能致、矧數千

【3ウ】

百石、威致自遠乎、噫、人役貨財之費、使人頻蹙者、是乎、道左有一帶溝址、導者云、所謂玉川有毒者是也、然而無滴水、可怪、或曰、玉川者去道若干町、有小流出於山根者、立榜書大師國風、此或然矣、右有柳數株、導者又云、此名蛇柳、爲詭說可笑、經中橋、得木食庵、避殺道人在焉、有骨堂者、諸州俗間、火化死者、收其牙齒、來藏焉、抵無明橋、橋下面寫梵字、蓋法華經云、或曰、橋稱無明者、非、俗謂大師墓稱御唐橋、在其前、故呼御廟橋、以國音相近、誤爾、歷萬燈堂、萬燈日夜不滅、蓋自古然、又有納骨堂開伽井、數十步爲詣

【4オ】

本廟、稱奧院、然營造整齊、雕鏤纖巧、亦無不善美、到則法筵既畢、衆還矣、堂左右有二異樹、一則松幹、柳枝葉、一則柳幹松枝葉、堂後爲山、如深者、產萬年草者、狀似側柏葉、而柔色深青、經年不變、故名、僧張几席、倍之、譎稱有瑞、可甚惡也、去堂數十步、有稱大師入定處者、石垣圍之、不可就見、有一小室、寂寥甚、人亦或不知焉、自女人堂至此都五十町、町立石紀程、又還故路、就一僧舍、點心焉、數百步得清岩寺、聞平秀次來此自殺、又得高山寺、東照大君廟在焉、若干町爲伽藍、得大塔浮屠二層尤敞方十二步、呼曰大塔、中安大日觀

【4ウ】

音阿彌陀勢至四像、至金堂亦頗大、安阿闍金堂石、爲影堂、亦方張法筵、衆蟻聚、不可近、詣影堂、堂前有三鉗松者、相

傳、大師會遊中土（唐順宗永貞中）、將歸也、一日舉三鉢杵、
誓曰、吾道廣長、於扶桑、則爲吾占一區、乃起擲東、杵飛
入天、後歸開山之日、杵懸於松上、不亦異乎焉、故名、不亦
怪哉、有丹生高野二祠、所謂鎮守者也、其他堂宇致多、
以雨故不、得悉探耳、至中門、右折二百步、到大門、
甚偉、左右立金剛力士二大像、出門爲花阪、由此而下至
天野、凡百二十町、亦町立石如前、紀其程、阪視前不動阪、
如稍陵、遲者、衆摩肩而下、亦如市、道傍有掛袈裟石鏡石
檢

【5才】

岩押上岩等、下五十町、得矢立哪、人家數四、有飯店一坐、
榻息焉、會有一老曰、卿等何之也、余曰、吾儕將至天野
齋尊院、明日遊弱浦可也乎、曰迂矣、不如取路於大洲、捷
也、余以二策、讓數人、皆左袒老言矣、出店左轉、此稱
卅三佛場、巡禮道、山逕寥寥乎、唯吾數人耳、過志賀哪、里戶
數十、或疏或茂、如棋置然、西望一山聳立、山上線白、
而逶迤者路也、此名之大洲嶺、舉趾浸高、然不甚峭、上
二三十町所、嶺極而下、路漸險惡、雨復大至、千絲如、機上、
百丈引、瀾而下、蓑笠不能勝之、浸潤及衣、陪下、陪險、
石角稜稜、齒鞋礙杖、皆蹣跚而下、蹶者屢矣、幾

【5ウ】

仆者一再、至此不得無、旅況、皆曰、前不從老言、豈遇
此難乎、可憐矣、廿町許、得大洲村、日將晡、所也、皆
困甚、乃一投焉、盛火於播盆、數人圍之、乾衣、其狀不可
目、相見、咲之、黃昏就飯、山村不慣客、炊熟失宜、亦
加、旅況也、一既而卧、曉、半醒半睡之間、側聞、漉漉聲不、斷

猶以爲、雨不歇、既與則朝日果果、透乎腳戶、皆喜甚、前流
漉者、屋後小流也耳、二十三日出哪、數町又涉紀川、一里、
抵粉川驛、驛盡得粉川寺、寶龜中大友王子者履之、卅三
大土之第三者是也、莊嚴宏麗大過、宿想也、九字不塗抹、相傳有
小流白、故名焉、又還初路出可三百步許、又抵紀川、買

【6才】

舟下、碧流疾甚、兩岸景物、時有佳者、然忽忽、目可
惜也、可三四里所抵岩手、客船皆息焉、少時又放、又二里
所出、舟隄行、歷八軒家、廿町所抵秋月村、調日前祠、祠
一名名草宮、又名檜隈宮、祀二神、一爲日前、奉日像、鏡者、
一爲國懸、奉日矛者、祠宇殆頽敗、春草及階、雖然、地境
之潤、林木之喬、可見千古一大祠也、已相傳、崇一神帝時、
思兼神、使石凝姥命、采天香久山金、鑄日像、鏡及日矛者、
更使天道根命、祭二寶於此、奉祠者爲紀氏、自稱天道根
之裔云、出西、若干町、由弱山城東、而南一里、到紀三井
寺村、就一店、午飯焉、出登山數

【6ウ】

十步、詣紀三井寺金剛峯寺是也、寶龜中僧玄坊創之、亦卅三之
處、第二者也、山有楊柳吉祥清淨三井故、名然也、地負
山面、風景佳絕、所謂弱浦八勝者、可一啊、而盡矣、佇
立久之、數人者趣行、乃行、有石階數十級、而高、此日、
數人者、前日雨行之疲、猶未復、乃階蹣跚而下、數等、更
蒲伏、余開口晒之、數十步至渡口、上舟赴弱浦、時潮退水
甚淺、舟不可行者屢、出步、水涯、此爲鹽場、平沙沮
湖、町畦區別者、若田、即詳村、民製、鹽云、散海水於沙
上、積其濕沙、作小山、中營二窟、一水瀝墜乎窟中、則汲而

煮之矣、卽詳以下或省之可也水浸深又上

【7才】

舟、可廿町許至岸、此名妹脊山、弱浦之一址也、風致不可言、地方數十步、若一石而成、有天文祠、不足觀、接西者爲玉津嶋、亦石也、蓋此數百步之間、皆然、石色青黑、有如木理狀者、實所他未見、別有龜遊岩、虎口石等、亦皆然、不亦一奇哉、調玉津島祠、神允、恭帝后衣通姬也、祠宇不甚飾、亦清絕可愛也、聖武帝曾幸于此、祭神焉、更帝謂弱浦、名明光浦、更西數百步、爲東照大君廟、所謂垂松者在焉、蒼翠可愛勝他、石階數十級、予攝衣先升、數人者亦匍匐、又大笑、蓋階謁廟、丹腹殿、齋、實瀝酒、廟堂也、有浮圖三層、竝建焉、亦頗佳、還南若千町、觀海、所謂片男波之所也、暮潮漲漲、風濤打岸、廣陵

【7ウ】

之遊觀不啼、亦一奇也、去西數町、左望石華表出於林表、問之爲昔厓也、以日莫故不探、適投宿焉、二十三日、日出、出弱浦旅亭、數百步得吹上松者、列樹千百、露根文餘、盤屈輪菌、如龍如蛇、千狀不可名、亦一觀、一里抵和歌山、藩城去、路數百步、惟見天守臺者、擢于松杪耳、街衢亦一偏也、以故不甚繁華、然而侯族大夫之莊野、莊廳者、往往有焉、行若干町歷城下、又得紀川舟、西經千步松林及二三里所、抵加多、人家千數、頗整、西一半爲粟嶋、至海盡矣、調淡島祠、臨海而高、神爲少彦、側有虛空藏堂、下石階出汀、細環貝雜沙、有文彩奇麗者、凡遊此

【8才】

者、必綴之齋歸、又有海帶、亦稱名產也、還就一店、午飯

焉、一漁生來云、公等將赴泉乎、吾舟歸泉、請同之、言苦務、而其心在乎孔方耳、皆欲從乃許之、出發舟、碧水渺渺、一目千里、風光與吾心豁然、想鷓鴣子之去、越、憶海客之乘、棹、仰望山樹之鬱蒼、俯視魚鱗之游泳、亦一奇哉、西去七八里、有十馬州者、殊大、漁生云、州亦本藩所係育馬之所也、越島數十里、遙碧一帶、橫附一水面者、問之、河波州也、行三四里抵谷川驛、此爲泉之南疆也、舍舟上岸、余等不恨舟、步則漂漂乎、猶在海者、甚則欲眩、借一菜店、眠、須臾乃醒、辭店而行、經深

【8ウ】

日淡輪等村、日已昃、逢土人、問可投之處、云、近則無有焉、有信達驛者、感官道也、客館殊多矣、蓋踰此一里許也、行矣力哉、暮夜、則有失乎、謝別之、余與一二先進、甚勉、可三三十町乃莫、倍進倍疾、岐路迷岐者屢、每逢一人、必問、夜初鼓、抵信達、就逆旅、然三者猶在後、恐其失、乃使二夫、適逐、醉時同歸、相勞喜甚、仍問其狀、果然、大失、皆疲甚、速就臥、二十四日、詰朝發館、經櫻井安松村、謁鐵通祠、松林幽絕、唯見二三樵蘇耳、西折、至佐野、地濱海、運送殊便、以故富豪之族、聚焉、所謂食氏者、其選也、三五町爲湊、北十町亦富饒也、右

【9才】

轉、合前官道、抵章魚茶肆者、又三五町抵貝塚驛、豐饒之所也、不讓、盤殺下、十八町爲岸曲城、城墻郭門頗嚴、人、民口、(虫損)富、一如貝塚、街間有章魚地藏者、會爲佛緣日、近隣者群聚焉、行若干里、又經春木忠岡、大津助松高石等村、得濱寺松林、林長、一里許、白沙沒踝、風、則不可行、多松

露、女兒結襪之者遊^レ焉、又數十町過石津村、抵^レ左^レ海、已過
午後矣、此日也、相戒趣^レ行、自^レ信達^レ至此凡七里、一不^レ駐
杖、惟愕然者腹^レ耳、就^レ一館、命^レ治具、殊緩、皆曲^レ肱^レ而遲、
少之、報^レ炊熟、迺嚙而出、日入歸^レ家矣、詩二十首、別錄云附于
後云」

【9ウ】

乙巳十月念日校合畢」

注

(1) 日本史の分野では山中浩之らによる研究が、医学史の分
野では田中祐尾の研究がある。

(2) このうち「採夷吟草」については拙稿で取り上げた。新
稲法子「舟木杏庵『採夷吟草』の紹介と翻刻」、「上方文藝
研究」第20号、二〇二三年六月二七日、所収。

(3) 「大阪名家著述目録」、大阪府立図書館、一九一四年。

(4) 多治比郁夫「北山橋庵雜記」、日本書誌学大系89(1)
『京阪文藝史料』第一卷、青裳堂書店、二〇〇四年九月九
日、所収。

【附記】本稿は科学研究費基盤C近世河内地方における漢文学
の総合的研究(21K0317)の成果の一部である。

(佛敎大学非常勤講師・国文学)

編集後記

新型コロナウイルスのため通巻を余儀なくされてきた
諸学会の活動もようやく対面による大会の開催
が一般化し、自粛されていた懇親会なども徐々
におこなわれるようになった。リモート開催に
よる便宜も小さくないことが分かったが、対面
による交流の意義、有り難さは計り知れないと、
つくづく身に染みて思うことである。

さて本号、国語・国文、国書関係では、四本
の論考を掲載することができた。

樋口百合子氏は、日本大学蔵の、「歌枕名寄」
抄出本である「頓阿法師名所集」をあらためて
精査、報告を寄せられた。非流布本系の性格を
有し、田中本や毛利本と同様の傾向が観察でき、
万葉歌受容に独自性が看取できるなど、詳細な
検討の勞に敬意を表したい。

芝崎有里子氏は、柳原紀光の隨筆「閑窓自語」
中の一話を取り上げ、その記事に関連する「統
古事談」は岩瀬文庫に紀光所持の可能性のある
写本が存すること、また紀光編「統史恩抄」の
朱注によって「兼宣公記」が参照されたことを
述べられた。具体的にどの史料から史実認識が
形成されたかが解明され、興味深い。

新編法法子氏は入手された河内の医師舟木杏庵
の資料から、漢文紀行「南遊紀事」を紹介する。
天明四年三月、高野山への参詣を中心とした紀
行である。近世大坂の文事を考えらうえでも貴
重な翻刻と言えるだろう。

浦野都志子氏は、一連の黒河春村研究の展開
として、小中村清矩が著した「尾張国解文略説」
について、東大総合図書館が所蔵する春村校訂

本（小中村本）を仔細に調査、「小中村清矩日
記」を参酌しつつ執筆背景を解明し、その注解
の質を定位された。

（兼築信行）

今号の渡籍関係論文は三篇である。河野論文
は、河野氏の母方実家に伝存する高句麗「好太
王（広開土王）墓碑」の光緒二年拓本による
校訂された転写本の紹介である。いわゆる光緒
二年拓本は、同碑文を詳しく研究された故武田
幸男博士が、かつて「幻の名拓」光緒二年本」
の正体―広開土王碑おほえがき」（本誌十五号
一九八九）で論じられたとく現存せず、実
在したかどうかも疑問視される。この転写本の
由来には不明な点があるが、今回の紹介が契機
となること専門家の調査が行われ、詳細が明らか
となることを期待したい。

大木論文は、明末白話小説の編著者として有
名な馮夢龍が、その最晩年に明朝滅亡前後の情
報を集めて刊行した「中興実録」、その統編
「中興偉略」の現存刊本、写本について詳述し、
併せて日本への伝来に及ぶ。ジャーナリストと
しての活動もさることながら、その愛國の志を
見るべきである。中興が絶望的となったにも
かかわらず、母名を「実録」から「偉略」に変
えているところが何ともいいたましい。

小谷・佐々木論文は、清代閩帝信仰の重要資
料である善書「閩帝明聖経」の怡怡堂刊本（佐々
木氏所蔵）に見える「靈驗記」を手掛かりに、
同書の成立が従来中国の学界で考えられていた
より早く、乾隆年間にあることを説き、さらに
その刊行、伝播が個人や善堂のネットワークを
通じてチェーンメーブル式に広まっていたと論じ、
今後さらに日本所在本の調査が進み、特に江戸

時代において本書がどの程度受け入れられてい
たのかが明らかになることを望みたい。

【語類】訳注は前回につき「論語」の「道
千乗之國」章である。本章「集注」では「五者
（敬・信・節用・愛人・使民以時）は反復相因
り、各々次第有り、読者宜しくこれを細推すべ
し」とのみあるが、「語類」では弟子との問答
を通じ、敬であつても信でない者、敬信はでき
ても資沢で節用できない者がいるなどと詳しく
述べているところが興味深い。

「涓涓滴滴」第四回は、岸本先生に書いてい
ただいたところ、第一回の亀、第二回の猫につ
いで、とうとう妖怪が出て来た。連載も漸く佳
境に入った。次はさて何が現れるか、どうぞお
楽しみに。（金文京）

【投稿規定】

一、雑誌「汲古」は、半年刊で、発行部数は一
万二千部、内外の研究者・大学・研究機関・図
書館に送られています。

二、投稿原稿は、原則として四〇〇字詰二〇枚
以内、常用漢字使用といたします。打ち出しコ
ピーに電子データを添えてご郵送下さい。

三、写真・図版または翻刻等の掲載・転載許可
については、執筆者の責任でお取り下さい。

四、原稿締切は、二月末日（六月発行予定）と
八月末日（十二月発行予定）です。編集委員会
で採否を決定します

五、バックナンバーにつきましては、お問い合
わせ下さい。

六、ご住所変更やご不要の節は、同封の注文ハ
ガキで是非お知らせ下さい。